



第 1 日

国 語

(9 : 30 ~ 10 : 20)

注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙は表紙を入れて6ページあり、問題はーから三まであります。これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一 次の文章には、去年三上くんから「かまくら」(雪でつくった部屋)を一緒につくろうと言われ、それからずっと楽しみにしていた泰司が、三上くんの言ったことは嘘うそだったと知り、怒ってけんかしたあとのことが描かれています。この文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

仲直りはしなかった。だって悪いのはあいつなんだから——三上くんも同じように思っているはずだから、よけい自分から謝るのは嫌だった。ランドセルがやけに重い。半ズボンからのぞく太股かたももや膝小僧ひざごろうが寒い。ジャンパーの袖そでに手を隠して、とぼとぼと校門を出たとき、後ろから呼び止められた。「なにやっつてんだよ、待ってって言ってるだろ。」三上くんはランドセルを叩たたかれた。「……そんなのオレの勝手だろ。」うつむいたまま低い声で答えると、三上くんはへへッと笑って、「さつき、つていうか……去年、ごめんな。」と言った。¹なんだこいつ、あつさり謝つちやつて。泰司は足を速めた。三上くんもついてきた。泰司は逃げる。三上くんは追いかける。逃げる。追いかける。逃げる。追いかける。逃げる。追いかける。逃げる……。

頬ほほに冷たいものが触れた。あつ、と泰司は声にならない声をあげて立ち止まった。雪だ。風に乗って、白いものが舞い落ちていた。積もるような降り方ではない。ほんの少し雲が晴ればすぐにやんでしまいそうな、頼りなげな初雪だった。それでも——雪だ。

三上くんも立ち止まって、空を見上げた。「雪だなあ……。」なに言っただ、そんなの見ればわかるだろ、と泰司はにらむように空を見上

げる。「これだと、意外と^①奇跡で積もるんじゃないか？」調子のいいことばかり言つて。自然と頬がゆるんで、まっげに雪が降り落ちた。三上くんは泰司が a ので安心したように、その場でびよんびよん跳びはねた。口もばくばく開けている。「なにしてんの?」「雪、食ってんの。これだったら、積もらなくても遊べるだろ。」ばくつ、ばくつ、と降ってくる雪を食べる。ほんとうに口の中に雪が入っているかどうかはわからなかったが、三上くんは、とてもおいしそうな顔をしていた。子どもっぽいだろ、こんなの。心の中でつぶやきながら、泰司もやってみた。意外と難しい。だから、たまに口の中に冷たいものが入ってジュッと溶けると、やっつた、と声をあげたくなるほどうれしかった。

「オレ……三月で転校するんだ。」三上くんは、ふうん、とうなずいただけで雪を食べつづけた。それだけ? 泰司はちよつと拍子抜けして、でも、がっかりしたのを悟られたくなくて、黙って口をばくばくと動かした。

ずつと上を向いていたので首筋が^②痛くなってきた頃、三上くんの声がか、やつと聞こえた。「なんで?」思わず振り向くと、三上くんは空を見上げたまま、「なんで転校しちゃうの?」と重ねて訊きいてきた。「なんで、つて……お父さんが転勤するから。」「それで一緒に行くの?」「うん……。」ふうん、と三上くんはまたうなずいて、「いそうろうは?」と訊いた。「ドラえもんとか、オバケのQ太郎みたいなもの。」あまりにも^③唐突な一言にどう応こたえていいのかわからず、泰司はちよつと困った顔で笑うだけだった。でも、三上くんは「オレ、二段ベッドでもいいけ

ど。」と怒った声でつぶつけた。「二段ベッドの下のほうでも、いいけど。」一瞬きよとんとした泰司だったが、あ、そうか、と三上くんの言葉の意味に気づくと、困惑した笑顔が微妙にゆがんだ。三上くんも自分の言葉に急に照^④られてしまったみたいに、いきなり駆けだした。空を見上げたまま。口を開けたまま。飛行機みたいに両手を広げて。

しばらく走ったところで立ち止まり、振り向いた。三上くんの顔もゆがんでいた。なにか言いたげに口が動きかけた。でも、それを振り払うように、「走ってたほうが、雪、たくさん食える。」と笑う。「ほんとほんと、今度はほんと。」と念を押して、また空を見上げ、口を開けて走りだす。泰司も追いかけた。さっきの三上くんを真^{まね}似して翼のように広げ、口を大きく開けた。雪が降る。雪が口に入る回数はずまっているときとたいして変わらないような気がしたが、不思議なほど目のまわりによく当たる。まぶたに。まつげに。目尻^{めじり}に。目頭に。ひやつとした雪が降り落ちて、溶けて、また当たって、また溶けて。だから、目がひくひくしてしかたない。雪が降る。頬²で溶けて口に入った雪は、ほのかにしよっぱかった。時化^{しけ}た海の波しぶきを風が運んで、雪と混じり合ったせいだ。たぶん。(重松 清 「その年の初雪」による。)

(注)時化する || 雨風で海上が荒れる。

1 ①④の漢字の読みを書きなさい。

2 a にあてはまる最も適切な語句を、次のア～エの中から選び、

その記号を書きなさい。

ア いらんだ イ 笑った ウ 話した エ 謝った

3 b にあてはまる最も適切な語を、文章中から抜き出して書きなさい。

1 なんだこいつ、あっさり謝¹っちゃってとあるが、なぜ泰司は三上くんがあっさり謝¹ったことを意外に思ったのですか。四十文字以内で書きなさい。

2 頬²で溶けて口に入った雪は、ほのかにしよっぱかったとあるが、これは泰司のある様子を表現しています。その様子を、十字以内で書きなさい。

6 次の文章は、転校することを告げたあとの泰司の気持ちの変化について述べたものです。空欄Ⅰにあてはまる最も適切な語を、あとのア～エの中から選び、その記号を書きなさい。また、空欄Ⅱにあてはまる適切な表現を、十五字以内で書きなさい。

転校することを告げた泰司は、ふうん、とうなずくだけの三上くんの反応に(Ⅰ)した。しかし、その後の会話から、三上くんが(Ⅱ)を感じていることに気づき、三上くんと友情を改めて感じるとともに、強い悲しみを抱いた。

ア 落胆 イ 興奮 ウ 当惑 エ 安心

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

古典がなぜ何百年、あるいは千年以上もの長い時間生き残ってきたのでしょうか。仮にそれがまるつきりつまらない、そしてなんの志もないような低俗な作品であつたら、おそろくたちまち廃つて忘れられたソ^①ンザイになつてしまふにちがいありません。つまり、こんにち「古典」となつて数百年の年月を生き抜いてきたのは、ひとえにそれが「おもしろい」からにちがいありません。

その「おもしろい」というなかには、タンジュン^②にユーモラスでおもしろいというものもあるし、いろいろ含蓄のフカ^③いことを述べてあつて興味^い尽^きないというものもありましょう。あるいは諸国の珍しい世間話^{せけんわ}などが集めてあつて興味^{きょうみ}津津^{みんしん}々々という意味のおもしろさもありません。というふうには、そのおもしろさは硬軟さまざまとしても、必ずや、なんらかの意味でおもしろいと思つた読者がたくさんいたからこそ、そしてどの時代にも尽きせず喜ばれ続けたからこそ、¹古典文学として残つてきたのです。ここを忘れてはなりません。

ところで、ちよつと考えてみてください。「古典」として残つてきた作品が、何百年間も「おもしろい」と思われ続けてきたのはなぜでしょうか。

すこしでも時代が違えば、考え方も生活環境も、なにもかも違つていくから、同じ思いを共有することなんかできないのではないか、とそんなふうにいる人も、もしかしたらたくさんいるかもしれませぬ。

私は今まで、古典文学をたくさん読んできましたが、そのどれを読んでも、一行また一行と読み味わつていくにつれて、それらの文学のなかに書かれている世界が、なんだか映画の場面でも見るように、脳裏に思ひ浮かんできて、そのなかで主人公たちが、生き生きと動き出すのを感じました。いや、文字をただ文字として読むのでなくて、そういうふう²に、文字で書かれたことを立体的なイメージに変換して思ひ浮かべながら読むと、これが俄然^{がぜん}おもしろくなつてくる、ということなのです。

たとえば『平家物語』、これは鎌倉時代^{かまくらじだい}にできた物語ですから、遙か^{はるか}な昔です。しかし、そこに描かれている、たとえば平宗盛とその息子たちとの今生の別れの場面など読むと、あまりにかわいそうな親子の情愛に、非常に身につまされます。あるいは平忠度^{たいらのたどのり}が一旦都を落ちかけて、しかし、ごく僅か^{ちよ}の手勢のみをつれて駆け戻つてくる。そうして藤原俊成^{ふらのしゅんせい}の邸^{やしき}に訪ねてきて今生の別れを告げ、もし勅撰集^{ちやくせんしゅう}を選ぶと³きがあつたら、このなかから一首でも採用していただきたいという願いを込めて、一巻の巻物を俊成に託して去る、その^{いさぎよ}潔い別離の場面など、非常にすがすがしい文章で、ここも何度読んでも目頭が熱くなりま³す。それはどうしてなのでしょう。

人間の感情というものは、その時々で変化するものと、どう時代が変わつても決して変わらないものと、両方あります。

a

男女が魅

かれあつて愛し合う、そういう恋の気持ちなどというものは、昔も今も「変わらないもの」の代表です。どんな時代でも、やっぱり人を恋しく思う気持ちには、変わりがありませんね。あるいは、親子が無理やり別

れなくてはいけないというような場合の、その悲しみ、また死んだと思
っていた我が子に巡り合ったときの親の喜びとか、そういう感情もまた、

b

だから、恋の想いや、親子の情愛や、逆に恋人と^④ヒキ裂かれたり、
子を殺されたりしたときの恨みや苦しみなどという感情もまた、だれの
身にも共通するものだといって間違いありません。古典が「おもし
ろい」のは、まさにこの「変わらない」感情が人間にはあるからです。

(林 望 「文章の品格」による。)

(注) 俄然 || 急に。

勅撰集 || 天皇が命令を出して編集させた歌集。

1 ①〜④のカタカナにあたる漢字を書きなさい。

2 a にあてはまる最も適切な語を、次のア〜エの中から選び、
その記号を書きなさい。

ア つまり イ しかし ウ たとえば エ なぜなら

3 b にあてはまる最も適切な表現を、次のア〜エの中か
ら選び、その記号を書きなさい。

ア 決して変わるものではありません

イ 決して変わらないものではありません

ウ どうか変わってほしいものです

エ どうか変わらないでほしいものです

4 古典文学として残ってきたのですとあるが、筆者は、その理由を

第二段落の中でどのように述べていますか。三十字以内で書きなさい。

5 立体的なイメージに変換して思い浮かべながら読むとあるが、筆

者は、それをあることにたとえて表現しています。それを十五字以内
で書きなさい。

6 その潔い別離の場面とあるが、具体的にはどのような場面ですか。

三十字以内で書きなさい。

7 古典が「おもしろい」のは、まさにこの「変わらない」感情が人

間にはあるからですとあるが、それは、筆者が、人間に「変わらない
感情があることで、どのようなことができるかと考えているからで

すか。二十五字以内で書きなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中庸に曰はく、

「言願^ミ行^ラ、行願^{ミル}言^ラ。」

書き下し文

「言行を願み、a。」

いふ意味は、言と行とは相違なかるべし。言を出すに、¹わが身の行を

かへりみていふべし。事を行ふには、己^{おの}が言をかへりみて行ふべし。

いふことはやすく、行ふことはかたし。故に、言は²ひかへていひ、

容易で

困難だ

b は c より過³ぐすべし。かくのごとくすれば、言と行と相

超える

このように

違なし。³□にいふことあまり有りて、身に行ふことたらざるは、これ

多すぎるのに

十分でない

言行のそむけるなり。はづべし。
一致していないのである

〔大和俗訓〕による。

(注) 中庸 〓 書名。

1 a にあてはまる適切な語句を書きなさい。

2 b ・ c にあてはまる語の組み合わせとして適切なものを、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

ア (b 言 c 言) イ (b 行 c 行)

ウ (b 言 c 行) エ (b 行 c 言)

3 ¹わが身の とあるが、これと同じ意味の語句を、文章中から抜き出して書きなさい。

4 ²ひかへてを、現代かなづかいで書きなさい。

5 ³□にいふことあまり有りて、身に行ふことたらざるとあるが、そのような具体的な例を一つ考えて、現代の言葉で書きなさい。